

東方キリスト教世界とロシア(2)

1. キエフ・ルーシ

5 世紀以降、スロヴァキア付近のスラブ族の一部が東に移動し、東スラブ族（のちのロシア人・ウクライナ人・ベラルーシ人）が形成された。

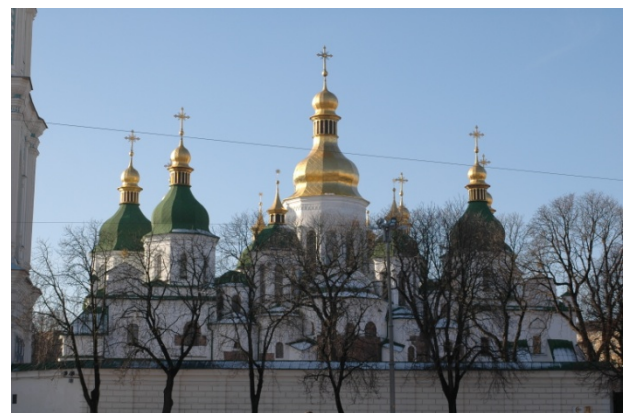
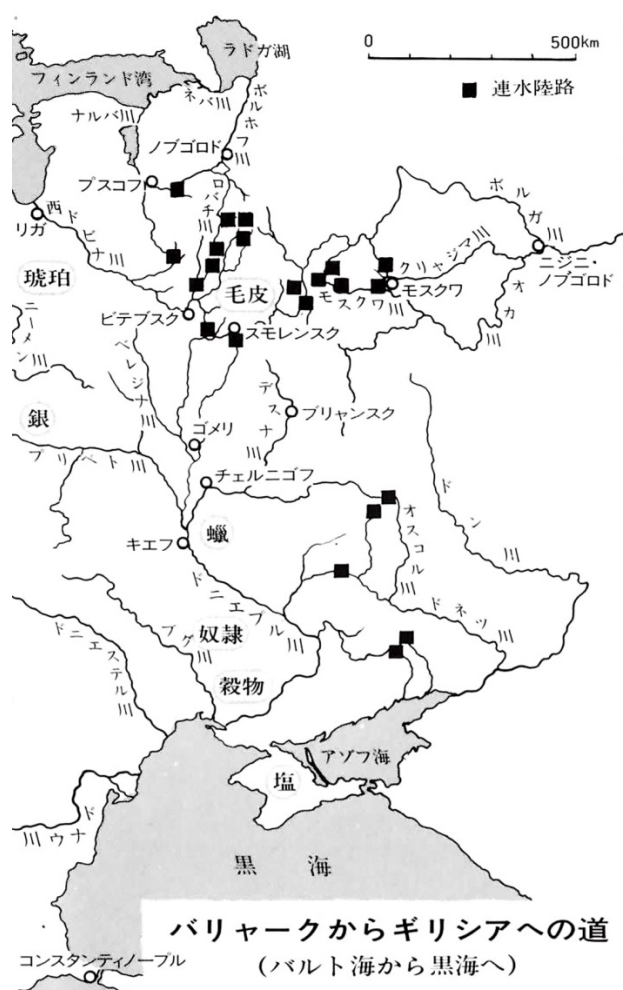
9 世紀末、東スラブ族の国、ルーシ Русь が歴史に登場する。ルーシは、スカンジナビア半島・バルト海と黒海・ビザンツ帝国（首都コンスタンティノープル）とを結ぶノルマン人の交易・通商ルートに位置していた。

この交易・通商ルートは、北から、バルト海→ネヴァ川→ラドガ湖→ヴォルホフ川→（陸路）→ドニエプル川→黒海というルートで、ヴォルホフ川上流からドニエプル川上流までのあいだに、比較的平坦で短い陸路があるだけで、あとは水運がある。このルート上のヴォルホフ川中流にノヴゴロド、ドニエプル川中流にキエフというルーシの二大都市が建設された。

『原書年代記』¹によると、ルーシの人々がノルマン人（ルーシではヴァリャーク人と呼んだ）に対して「ルーシは広大で豊かだが争いが絶えないので、ここに来て統治してほしい」と要請し、ノルマン人のリュリク（在位 862-879 年）がノヴゴロドに王朝を創建したとされるので、ルーシの最初の王朝はリュリク朝と呼ばれる。2 代目の王、オレク將軍（在位 879-912 年）がキエフを攻略し、キエフ・ルーシ（キエフ公国）の歴史が始まった。

2. キエフ・ルーシによるキリスト教の国教化

- | | |
|---------|--|
| 988 年 | キエフ・ルーシ、キリスト教を国教とする。ヴラジミル大公（ヴラジミル 1 世、在位 980-1015 年）、洗礼を受け、ビザンツ帝国皇帝バシレイオス 2 世の妹アナナを妻とする。 |
| 11 世紀前半 | スラブ語典礼の導入。 |
| 11 世紀中頃 | キエフ洞窟修道院の創建。 |
| 1223 年 | モンゴル軍、ルーシ南部に侵入後、撤退。 |
| 1237 年 | モンゴル軍、ルーシ東部から侵入し、モンゴル（キプチャク・ハン国）によるルーシ支配が始まる。 |

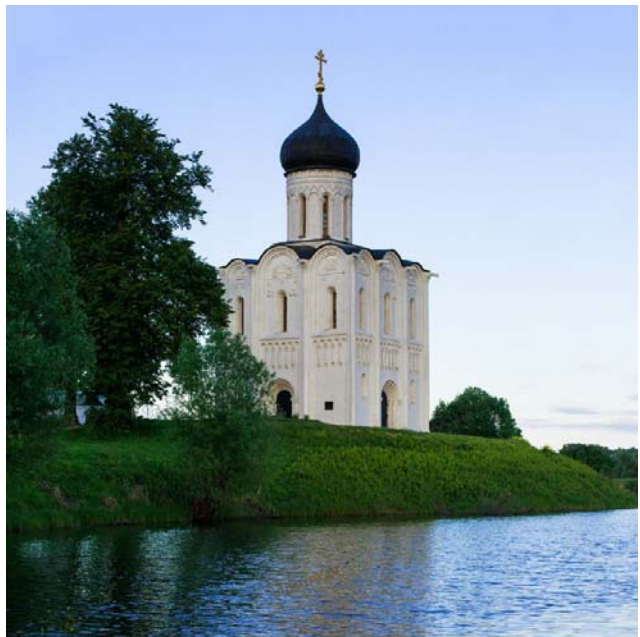


キエフのソフィア大聖堂（1037 年創建）

¹ 『原初年代記』は、およそ 850 年から 1110 年までのキエフ・ルーシの歴史について記された年代記である。初版は 1113 年。『過ぎし年月の物語』とも呼ばれる。



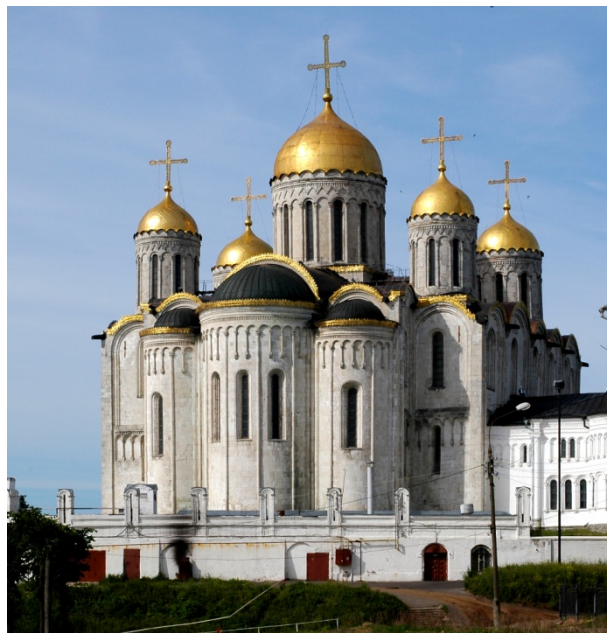
ボリスとグレブの教会（キデクシャー。1152 年）



至聖生神女庇護教会（ボゴリユーボヴァ。1165 年）



ドミトリエフスキー聖堂（ヴラジミール。12 世紀末）



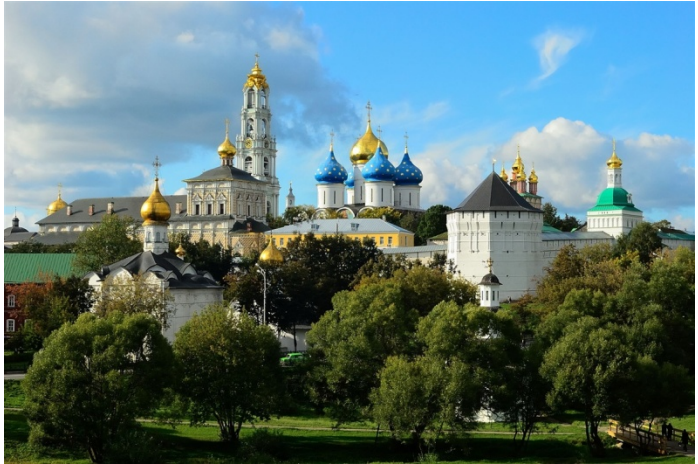
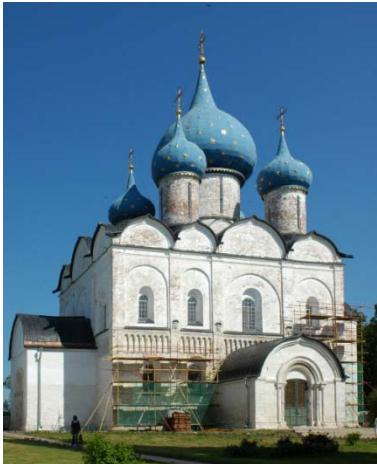
至聖生神女就寝大聖堂（ヴラジミール。12 世紀末）

キプチャク・ハン国の支配者は、少数のモンゴル人と多数のチュルク系諸民族により構成されていたが、ルーシでは彼らをタタール人と総称し、彼らによる支配を「タタールのくびき **тагáрское ýго**」と呼んでいる。モンゴルの支配は、ロシア史にとって以下のような大きな意味を持つ。

①ルーシは、アジアとヨーロッパをまたぐユーラシア帝国の支配下の一部となった。

②ルーシは、モンゴルの支配をその強大な軍事力によって強制されただけでなく、生き残りのために自らその支配を受容することを選択した。すなわちルーシは、ドイツ騎士団の支配下に入り、モンゴルに徹底抗戦する道もあったが、ドイツ騎士団によるローマ教会への服従の要求を嫌い、宗教的に寛容なモンゴルによる支配を選択した。

- ③パリに比肩するほど発展したキエフが衰退した。
- ④ルーシの西部・南部が離脱し、ペラルーシ・ウクライナの萌芽が生まれた。
- ⑤ルーシの諸公国（とくにウラジーミル大公国、モスクワ公国）の専制が強化された。



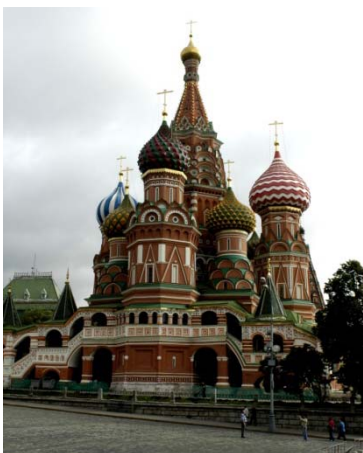
至聖生神女誕生教会（スズダリ。1222 年創建） トロイツェ・セルギエフ修道院（セルギエフ・パサート。14 世紀）



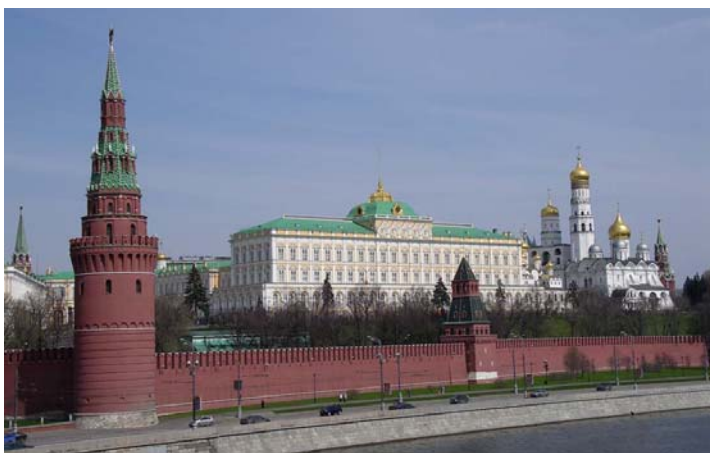
ラザロ復活教会（キジ島。14 世紀）



キリスト変容教会（キジ島。1714 年）



至聖生神女庇護教会（モスクワ。1560 年）



クレムリン（モスクワ）

3. モスクワ国家の形成からロシアへ

- 1310 年 キエフ府主教座、モスクワに移転。
- 1380 年 モスクワ公国軍、クリコヴォの戦いで、キプチャク汗国軍に大勝。

- 1439 年 オスマン帝国の攻撃にさらされたビザンツ帝国がローマに支援を求めると、ローマは東方教会の服従を求め、フィレンツェ公会議で東西教会の合同が決定されたが、東方教会の多くは反発。モスクワのイヴァン 3 世（在位 1462-1505 年）もこれに反発、ギリシアから送られた府主教を合同に賛成しているとして廃し、モスクワ総主教の独立を達成。
- 1453 年 ビザンツ帝国が滅亡。
- 1472 年 ローマ教会はイヴァン 3 世を懐柔するため、ビザンツ帝国最後の皇帝コンスタンティヌス 11 世の姪ゾエ（ソフィア）をイヴァン 3 世に嫁入りさせるが、かえってイヴァン 3 世はこの結婚によりビザンツ帝国の正当な後継者を名乗ることになり、「ツァーリ Царь」（ビザンツ帝国皇帝の称号カエサルロシア語）と称し、ビザンツ帝国の双頭の鷲の紋章をモスクワ公国の国章として採用。モスクワは「第三のローマ」を自称するようになる。
- 1598 年 イヴァン 4 世の息子フォードルの死によって、リューリク朝は断絶。
- 1613 年 動乱（スムータ смута）の時代（1604-13 年）を経て、貴族会議でロマノフ家からツァーリが選出され、ロマノフ朝始まる。



4. 教会の政権への従属

- 1652 年 総主教に選出されたニーコン Никон は、教会典礼の改革に着手したが、民衆の反発を呼び、新しい儀礼を拒否した分離派 раскольник が登場し、教会は分裂して弱体化し、教会の政権への従属が強まる。
- 1721 年 ピョートル 1 世（大帝。在位 1682-1725 年）はスウェーデンとの北方戦争（1700-21 年）に勝利し、1721 年のニスタット条約によりバルト海への出口を獲得し、この間、サンクト・ペテルブルクの建設が進められた（1703-12 年）。



ニーコンの小修道院（イストラ。1658 年）

5. ロシア正教会の発展

「第三のローマ」を自認するロシア皇帝は、西方教会の誤りを正し、正教を広めることで世界を救済するというメシア思想を持つようになり、これがロシアの対外膨張主義の遠因であるとする説があるが、これは冷戦期のバイアスに基づく説と考えられ、そのように考えるべき証拠はない。

実際、幕末における宣教師ニコライの来日による日本における正教の布教も、ニコライ自身の日本語習得、日本人宣教師の育成を始めとする土着化に基づいて実施されており、ロシア帝国の膨張主義とは無縁であった。

1917 年 11 月のボリシェヴィキ政権の成立により、ロシア正教会は弱体化したが、第 2 次世界大戦中の愛国主義の強まりとともに正教会も復活し、ソ連崩壊後は教会の復興・再建も相次いでいる。



冬の宮殿（エルミタージュ博物館）（サンクト・ペテルブルク）